

〈外国語〉

英語でやり取りする力を育成する指導の工夫

—— Small TalkやSkit等のスピーキング活動の充実を通して（第2学年） ——

石垣市立白保中学校教諭 高原 かおる

I テーマ設定の理由

令和3（2021）年度より完全実施となる中学校学習指導要領では、互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視している。さらに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にする観点から小学校・中学校・高校と一貫した聞くこと、読むこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くことの5領域ごとに目標が示されている。また、小学校で扱われてきた基本的な表現などの学習内容を繰り返し指導して定着を図ることとし、授業を実際のコミュニケーションの場とすることが求められている。

4技能・5領域のコミュニケーションを図る資質・能力を総合的に育成していくことが目指すねらいであるが、上山晋平（2018）は「スピーキングは読み、書き、聞く能力を支えている技能だ（中略）スピーキングを重点的に指導することによって、他の技能の力も自然と身についてくる」と述べている。コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、自分の考えや気持ちを適切に表現したり、伝え合ったりすることができる生徒の育成に向け、話すことの言語活動を十分に行うことが必要だと考える。

沖縄県学力到達度調査（英語）では、イラストを見ながら教師の質問に答える等の一問一答型のスピーキング・テストが平成29年度から実施されている。その調査では、文法的な誤りのある解答を含めても、適切に答えられる生徒が多かった。授業での教科書本文の内容理解でQ&Aを行う場面でも同様で、質問を理解して答えることのできる生徒が多い。ところが、これまで授業の中で実践してきた **Small Talk** では、課題を感じていた。与えられたテーマや質問からペアと対話を行う生徒たちは笑顔で身ぶり手ぶりを交えながら前向きに活動している。しかし、会話を継続させるために必要なつなぎことばや相づち等の表現が十分に定着していないことに加え、会話を広げるために突っ込んだ質問をするまでには至っていない。既習事項を活用して表現してみようという意識の不足も考えられる。効果的な手立てを授業で取り入れることができず、生徒たちは「英語で話す」＝「相手の質問に答える」だけに留まってしまい、自然な流れで言いたいことを伝え合うまで深めることができていなかった実態が挙げられる。

中学校学習指導要領解説外国語編（以下、要領解説）では、「即興で伝え合う」「考えや気持ちを整理して伝えたり、質問に答えたりする」「社会的な話題について聞いたり読んだりしたことを述べ合う」のキーワードで、話すこと〔やり取り〕の目標が示されている。これらのゴールに向かって、生徒が興味・関心をもち、英語で話さなければならない必然性のある場面設定の工夫を行い、既習事項が活用できるスピーキング活動を充実させていきたい。**Small Talk** には、相手の発言に反応する相づちや繰り返し、感想、質問を付け足すスキルを段階的に取り入れ、活動後の振り返りから定着につなげたい。**Skit** は原稿作成時に展開やつながりを意識して取り組ませることで、会話の流れに応じた表現を定着させる効果的な活動になると考える。

このように、生徒が主体的に **Small Talk** や **Skit** 等のスピーキング活動に取り組み、その内容の工夫・改善を行うことで、会話を発展・継続させる生徒の話すこと〔やり取り〕の力が育成できるのではないかと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

場面設定を工夫し、会話を継続させるための表現を活用した **Small Talk** や **Skit** 等のスピーキング活動の充実を図ることにより、英語で会話をやり取りする力が育成されるであろう。

II 研究内容

1 話すこと [やり取り] について

英語能力指標の国際的な基準とされているヨーロッパ言語共通参照枠（以下、CEFR）の分類を参考に、学習指導要領は4技能・5領域に区分された。CEFRでは、「やり取り（interaction）は2人以上が話したり書いたりする中で交互に受容（reception）と産出（production）を繰り返し、ことばを交換する行為」とし、コミュニケーションの中核的な技能と位置づけている。さらに、やり取りでは「相手の言うことをしっかり聞く、理解するように努める」ことが大切であるとして、聞くことにも留意するよう示されている。また、実際のコミュニケーションの場面で自然に行われている会話の切り出しやその流れをコントロールすることが、要領解説の話すこと [やり取り] の言語活動に関する事項に含まれている。

本研究では、やり取りを要領解説の話すこと [やり取り] の言語活動Aに重きを置き、「相手からの質問に対し、その場で適切に応答したり、関連する質問をしたりして互いに会話を継続する活動」と位置づける。同じく要領解説で示されている会話を継続・発展させるために必要なこと（図1）を身につける授業展開を図りたい。

- | |
|--------------------------------------|
| ①相手に聞き返したり確かめたりする |
| ②相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりする |
| ③相手の答えを受けて、自分のことを伝える |
| ④相手の答えや自分のことについて伝えたことに「関連する質問」を付け加える |

図1 会話を継続・発展させるために必要なこと

要領解説では指導の配慮事項として、やり取りの際に「最初から流暢かつ正確な言葉遣いで応答ができることを求めるべきではない」としている。身振り手振りや表情等の非言語を活用しながら、相手に伝える内容を考えて即座に応答する姿勢を身に付けさせたい。教師が介入できる場面では、「How do you say 簡単だよ in English?»等の Classroom English を用いて表現の幅を広げさせ、生徒が単語を並べただけの発話であった場合は、教師がそれを拾って言い換えることで、正しい言語形式に気づかせる機会を与えたい。

2 場面設定の工夫

どの活動においても、生徒の興味・関心を高め、学習の意欲につながるのが場面設定である。要領解説では、関心のある事柄として「スポーツ、音楽、映画、テレビ番組、学校行事、休日の計画、日常の出来事など身の回りのことで生徒が共通して関心をもっていること」を扱うと示している。さらに、「ペア・ワークやグループ・ワークを行う際は、お互いに興味・関心をもって話し合い、相互理解を深められるような題材や活動の工夫」が求められている。学習指導要領の改訂で「3 指導計画の作成と内容の取扱い」に「オ 言語活動で扱う題材」についてが新たに追加されたことから、題材設定の重要性が伺える。鈴木寧子（2017）は「生徒が主体的に言語活動に取り組むためには、扱う題材やテーマ、トピックなどの善し悪しは大きな要素となる。生徒が実際に自分の考えや気持ちを伝えたい内容になっているか、コミュニケーションを通して自分の考えを深めたり、友人の意見を聞いて、更に新たな気付きが生まれるような題材になっているかに配慮する」と述べている。加えて、山田誠志（2018）は、「伝え合う内容があってこそその英語の授業」とし、コミュニケーションを行う本来の目的に沿った授業を提案している。「なりきり活動」の多用から脱却し、本当の自分の考えや気持ちを伝え合うことの必要性を示している。以上の点から、生徒が「伝えたい、伝えないといけない」題材や場面を作り上げる必要がある。

3 Small TalkやSkit等の改善・充実について

(1) Small Talk

Small Talk は小学校外国語の移行措置対応として高学年で使用されている教材「We Can! 1」「We Can! 2」でも位置づけられている言語活動である。ねらいとして、既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、対話の続け方を指導すること、の2点が示されている。授業始めの帯活動として計画的系統的に Small Talk を取り入れ、会話を継続させるための手立てとしてあいさつや確認のための繰り返し、相づち等を段階に応じて取り入れ

る。また、日常的な話題について自分の考えや気持ちなどを伝え合う活動を行うことで、生徒の英語力を継続的に向上させる効果的な取り組みになると考える。教師やALTによるまとまりのある話を聞いて理解したり、教師と生徒間のやり取り、生徒同士のやり取り、といくつかの形態があり、さらにそれらを組み合わせて行われることも多いが、言語材料や単元内容等に応じて、活動形態や時間設定を工夫して行いたい。

① Small Talk の流れ

トピックを与えた後、暗示的インプットとして使用してほしい表現や文を教師から提示することからスタートとする。教師が多く使用することで、生徒の耳に入れ、1回目の活動に入る。その後、中間交流として「言いたかったけど英語で言えなかったことは？」と生徒の困り感を取り上げ、2回目の活動、全体での振り返りへとつなげる(図2)。



図2 Small Talkの流れ

② Small Talk の改善

これまでの実践では、前述のテーマ設定理由で挙げた課題に加えて次のような反省点が挙げられる。ア 与えられたテーマや質問等のトピックに新鮮味がなかった。イ 時間設定はあるものの生徒には残り時間が提示できていなかった。ウ 活動の振り返りとしてのフィードバックが不十分であった。エ 活動を通しての個々の生徒の成果を示してあげることができなかった。以上の点から、図3に示した改善を図って授業で取り入れる全ての Small Talk の中で実施したい。

ア	内容は「好きな方を選ぶ」とやる気がアップ 自分たちで選んだことにより「やらない」がなくなる	⇒	トピックは複数示して選ばせる
イ	残り時間が把握できないと「急に終了」となり、 活動が途中で遮断されてしまう	⇒	生徒へ活動時間を示すため大型タイマー を活用し、残り時間を口頭でも伝える
ウ	表現の間違いに気付くことで習得へのステップとする	⇒	活動後にクラス全体で共有して修正する
エ	目に見える成果を示すことで次回への意欲につなげる	⇒	ワードカウンターの活用により成長の 様子を示す

図3 Small Talkの改善

③ Small Talk に取り入れる活動

ア 会話を継続させる「ニアシの法則」

上山晋平(2018)が行っている効果的な指導のポイントとして、「2文で答える(もう1文の新情報を付け足す)」「相づち(会話が促進する要素)」「質問(会話の発展につながる)」の3つの語頭をまとめた「ニアシの法則」(表1)を挙げている。Small

表1 「ニアシの法則」

2文で 答える	A: Do you like baseball? B: Yes, I do. I like Hiroshima Carp.
相づち	Really? / I see. / That's great. Pardon? / That's too bad. / It was fun.
質問	How about you? / When? / Where? How long? / And then? / Who with?

Talk に1つずつ段階的に取り入れ、即興で話し続ける活動につなげたい。

イ The 4/3/2 technique

Nation(1989)が提唱した活動で、スピーキングのトピックを与えて学習者に取り組みさせる際、それぞれ4分、3分、2分と時間を短くしながら3回繰り返して活動することで流暢さが増すという指導法である。普段、コミュニケーションを図る際には頭の中で考えたことを言葉にするまでに、多くの情報を瞬時に処理している。英語でその作業を行うことに慣れていない場合、面倒になって伝えたいことを諦めてしまうことも少なくないとする。しかし、話したことのある内容を再び発話する作業を繰り返すことで、内容の精選もでき、洗練したコミュニケーションとなることが期待できる。実際の授業では、4分スタートにはこ

変わらず、2回目以降を短くして活動させたい。

ウ インタビュー活動

自然な会話のやり取りが発生するインタビュー活動は、会話を切り出し、流れをコントロールする指導において有効だと考える。ペアで互いにインタビューし合うことにより、自分か相手かどちらから会話を始めるか等の戸惑いがなく、相手のことを調査しようという視点からの絞った質問を行うことができると考える。

(2) Skit

広辞苑では Skit を「寸劇」と示している。ペアやグループで演じながら表現を習得することができる活動である。会話の展開やつながりを意識したセリフを考え、練習して覚え、発表することにより、自然な会話のやり取りを身に付けるのに効果的である。しかし、原稿作成やセリフの暗記に時間を要するため、教科書本文に文を追加したり、一部を変えて原稿とすることや各レッスンの言語材料を活用させることで取り掛かりやすい活動に工夫し、授業で取り入れる。Small Talk で身に付けた会話を継続させるスキルを定着させる手立てとしても活用したい。また、それぞれ発表を行うことで、参観する側にとっては他ペアや他グループのやり取りに刺激を受け、互いの意識や関心を高め合い、会話のやり取りを多くインプットできる場面となる。

4 評価について

要領解説では、話すこと [やり取り] の活動中の言語使用について具体的にフィードバックしたり、活動後に生徒が自分の使用した英語について振り返り、場面に応じた適切な表現方法を確認する機会を与えたりすることが重要と示している。

(1) ワードカウンター

西巖弘 (2010) 考案のワードカウンター (図 4) を活用することで、数値化が難しいと思われていた流暢さが計れる。1分あたりの発話語数 (WPM、words per minute) を計測することで、発話量が目に見える数値となって現れることから、生徒の意欲付けに活用できる。ペアで話し手と聞き手 (計測者) となり、計測者は聞きながら指をスライドさせて語数を計測する。一分間モノログ (一人で話す) で使われることが多いが、ペア同士を組み合わせると Small Talk で取り入れていきたい。

Word Counter No.() Name									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
80	79	78	77	76	75	74	73	72	71
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90

図 4 ワードカウンター

(2) パフォーマンス・テストと

ループリック

コミュニケーションを重視し、スピーキングやライティングの能力を図るパフォーマンス・テストを行う。単元の到達目標として、パフォーマンス・テストの目的や内容を生徒に示し、準備を行い、評価基準を明確にして振り返りを行うのに有効である。さらに、評価基準は表 2 に示したループリックを用いることで、客観性が図られ、生徒にとっても見通しを持った学習や振り返りを行うことができる。

表 2 ループリック

表現	A	B	C
ニアシの法則	アイコンタクトをしながら相手と相づちや確認のための繰り返しをしながら会話している。	アイコンタクトをしながら相手と相づちか、確認のための繰り返しか、どちらかをしながら会話している。	相づちや確認のための繰り返しをして会話に参加するのに練習が必要である。
2文で答える 相づち・質問	質問に2文で答えたり、関連する質問をして会話を広げている。	質問に2文で答えるか、関連する質問をするか、どちらかをしながら会話を広げている。	質問に2文で答えたり、関連する質問をして会話を広げるのに練習が必要である。
文法	willやbe going toを適切に用いて、予定や計画を伝えることが2回以上できている。	willやbe going toを適切に用いて、予定や計画を伝えることが1回できている。	willやbe going toを適切に用いて、予定や計画を伝える練習が必要である。
	I think (that) ~等を用いて自分の考えを伝えることが2回以上できている。	I think (that) ~等を用いて自分の考えを伝えることが1回できている。	I think (that) ~等を用いて自分の考えを伝える練習が必要である。

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 2

Lesson 3 "The Ogasawara Islands"

2 単元目標

(1) 未来を表す表現 (will, be going to ~)、接続詞 that を使ってペアでやり取りを行う。

【外国語表現の能力】

(2) これまで学習した事項を使ってコミュニケーションを図る。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

3 単元の評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
間違ふことを恐れず積極的に ペアで会話を続けようとして いる。	未来を表す表現、接続詞 that を使ってペアで会話を続ける ことができる。		未来を表す表現、接続詞 that に関する知識を身に 付けている。

4 指導及び評価計画



時間	●ねらい ・学習活動	評価の観点と評価方法
1	●本単元で身につける技能や理解する内容について知る。 ・ Small Talk (「あいさつ」) ・ 自然環境の問題について関心を持つ。 ・ ルーブリックを見て、パフォーマンス・テストの目的や評価方法を知る。 ・ 時制について確認し、next Monday や tonight 等の未来を表す語を理解する。	【関心】 活動観察
2	●未来のことを will を用いてペアで伝え合う。 ・ Small Talk (ニアシの法則「2文で答える」) ・ 天気予報を聞いて理解したり、天気や気温を伝える。 ・ 天気予報をもとに予定を決め、ペアで伝え合う。	【関心】 活動観察 【知識理解】 (後日) 定期テスト
3	●教科書本文を参考にして、学校行事のポスターを作成する。 ・ Small Talk (ニアシの法則「相づち」) ・ 教科書本文のイベントのポスターを読み、理解する。 ・ 学校行事のポスターを作成する。	【関心】 活動観察
4	●予定や計画を be going to ~ を用いてペアで伝え合う。 ・ Small Talk (キーワードの繰り返し) ・ インタビュー方式で夏休みの予定について、たずね合う。	【関心】 活動観察 【知識理解】 (後日) 定期テスト
5	●教科書本文を参考にして、Skit を作成しペアで発表する。 ・ Small Talk (つなぎ言葉) ・ 教科書本文の会話を理解する。 ・ 教科書本文の一部を変えたり、追加して Skit を作成しペアで発表する。	【関心】 活動観察
6	●教科書本文を参考にして、Skit を作成しペアで発表する。 ・ Small Talk (ニアシの法則「質問」) ・ 教科書本文の会話を理解する。 ・ 教科書本文の一部を変えたり、追加して Skit を作成しペアで発表する。	【関心】 活動観察
7	●「私は〜だ」と自分の考えを伝える。 ・ Small Talk (「感想」) ・ 接続詞 that の用法について理解する。 ・ 身近な話題や環境問題について考えを伝え合う。	【関心】 活動観察 【知識理解】 (後日) 定期テスト
8	●小笠原諸島についての講演資料を読み、人々の願いや思いを読み取る。 ・ Small Talk (インタビュー方式) ・ 教科書本文についての質問に答え、内容をおさえる。 ・ 小笠原の人々の願いや思いを理解する。	【関心】 活動観察
9	●「地球のためにできること」アンケートに答える。 ・ Small Talk (「ニアシの法則」質問) ・ モデル文を理解する。 ・ アンケートの内容を考え、メモを作成する。	【関心】 活動観察
10	●「地球のためにできること」アンケートに答える。 ・ Small Talk (トピック「今週末」「10年後の私」) ・ メモを基にアンケートの回答を書く。	【関心】 活動観察
11	●ペアでパフォーマンス・テストを行い、振り返りを行う。 ・ ペアでトピックを選び、予定や考えを入れた会話のやり取りを行う。	【表現】 ルーブリック

5 検証授業 (6/11)

(1) 目標

教科書本文をもとに、ペアで Skit を作成し、発表する。

(2) 展開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 と 支 援
導 入 10 分	1 あいさつ 2 Small Talk (1) 「キーワードの繰り返し」 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">繰り返し 😄</p> <ul style="list-style-type: none"> ● I like monkeys very much. → Monkeys? ● I studied math for three hours. → Wow! Three hours? ● I went to my father's office. → Your father's office? ● I passed the test yesterday. → You passed the test! ● Did you watch the soccer game on TV? → Soccer game? Oh, yes. It was great! </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 休み時間中のチャンツの楽しい雰囲気を継続させ、元気よく行う。 ・ 相づち等を入れて 2 文で繰り返すパターンも取り入れる。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">What are you going to watch tonight?</p> <hr/> <p style="text-align: center;">Who is your favorite singer?</p> </div>
	(2) ペア トピックを選択 (3) ペア 2 組 ワードカウンター (1 分間) で計測 	<ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれのトピックについて、使用してほしい表現を教師が話す。 ・ 電子黒板にタイマーを提示し、残り時間を伝える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>個々のワードカウンターシートに、「計測日・計測者・発話語数・形態 (1 人/ペア)・トピック」を記入。</p> </div>	
展 開 32 分	3 新出単語の確認 4 予定をたずねる会話内容理解 (1) リスニング (2) 内容 Q & A 5 本時のめあて確認 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>めあて KenとEmmalになりきってスキットを作成&発表しよう!</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ デジタル教材を活用する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>Meiling: Hi, Ken. What are you going to do during the summer vacation? Ken: I'm going to start my summer homework early ...</p> </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【関意態】 観察</p> </div>
	6 ペア Skit (1) 作成 (教科書本文への追加や一部変更) (2) 練習 (3) 発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Small Talk で活用した「相づち」や「質問」等を取り入れさせる。 ・ Good Expressions を取り上げ、板書しながら紹介する。 ・ 今回発表できなかったペアは次時に発表を行う。 	
ま と め 8 分	7 自力 「今日の 1 文」記入 8 自己評価表の記入 9 次時の予告 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>まとめ めあてが達成できたか。 振り返り 仲間から学んだこと。</p> </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>What TV program are you going to watch tonight?の答え</p> </div>	

6 仮説の検証

本研究では、単元全体に段階的なスピーキング活動の工夫を取り入れ英語でやり取りする力の育成を試みた。授業中の生徒の様子や自己評価表、アンケート結果、定期テスト、パフォーマンス・テストの結果等から検証していく。

第1時「あいさつ」	相づち 😊 同意・賛成 Me too. Oh, yes. / I think so too. / I agree. / Right. Sure. / No problem. / Of course. / Why not? 驚き Really? / Wow! Oh, no! / No kidding. Is that so? / I didn't know that. 理解 Oh, I see. / I get it. / I understand. 喜び・感動 Good! / Cool! / Great! / That's great. That's a good idea. / How exciting! 残念・心配 That's too bad.
第2時「2文で答える」	
第3時「相づち」	
第4時「繰り返し」	
第5時「つなぎ言葉」	
第6時「質問」	
第7時「感想」	

図5 Small Talkカード

(1) Small Talk の系統的な取り組み

① Small Talk カードの活用

毎時間 Small Talk の前に会話のやり取りに必要な相づち、繰り返し、つなぎ言葉等の表現を1つずつ提示し(図5)、カード型にして活用させた(写真1)。「それってどういう意味?」「何て言う?」等のクラスルーム・イングリッシュを載せた「ヘルプ」カードや新しく得た表現を書き込む「New」カードも合わせて綴り、使用した。"I'm (not) interested in ~."「～に興味がある(ない)」や"I want to eat (go to) ~."「～を食べたい(に行きたい)」等、Small Talk 中に言いたかったフレーズをメモすることで、表現の幅を広げさせることができた。活動後に行うフィードバックでは、実際に使ってみた表現にマーカーをする等、できるだけ多くの表現を使うことができるよう活用させた。

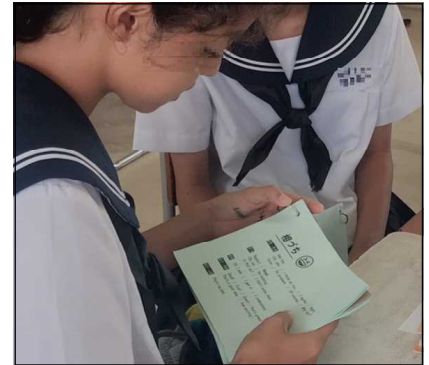


写真1 Small Talkカード活用の様子

② ワードカウンターでの計測

ペアを2組組み合わせ、それぞれ1分間ごとの発話を約1週間置きに計測した。Small Talk 活動そのものへの慣れや Small Talk カードの活用により、わずかな数値ではあるが、発話語数が増加した(表3)。計測の誤差やトピックへの興味により、多少の変動は感じられる。生徒個々を見ると、第1時での計測語数が低かった生徒ほど、伸びが見られた。西巖弘(2010)が、一分間モノログ(一人で話す)の目標語数を中学2年生で40~60と設定していることから今後もさらに計測を続け、長期的な範囲で成長を実感させたい。

表3 発話語数の推移

形態：ペアで1分間		
	第1時	第10時
生徒A	21語	50語
生徒B	18語	40語
クラス平均	30.5語	34.4語

③ Small Talk の様子

生徒が興味・関心をもって、ペアで Small Talk を行うために事前にどのような内容で Small Talk を行いたいかを書かせ、活用した。検証授業11回のうち、前半は2つのトピック、後半は3つのトピックからそれぞれ1つを選択させた。

場面設定の工夫の1つとして、写真2に示したスポーツ・航空機・コンサート等のチケットを獲得させ、夏休みの予定を互いにたずね、答え合う活動を行った。行き先や目的を示したチケットにすることで、自然な"What are you going to do during the summer vacation?"からスタートする会話を広げさせることができた。



写真2 予定を伝える教具

Small Talk の相手は、実際のコミュニケーション場面を意識し、座席の隣同士のペアからスタートし、2回目は座席前と後ろのペア、3回目は斜めペアとパートナーを替えながら行った。毎回変化する相手と、自ら選択し関心を持ったトピックでの Small Talk を継続することで、相づちやつなぎ言葉等が徐々に定着し、会話の中に沈黙がなくなり、相手の様子に合わせて自然

なやり取りが見られるようになった。

さらに、Small Talk は最初40秒間でスタートし、徐々に長くしていったが、1分間 Small Talk の後、同じ内容で再び40秒間取り組んだところ、生徒自身もスラスラと英語を話している実感をもったようで笑顔や驚きが見られた。毎時間記入する自己評価表や英語に関するアンケートの自由記述欄には、75%の生徒が図6に示したような前向きなコメントをつづっている。

○会話をふくらますことができた。 ○ Small Talk で前より英語が言えるようになったり、聞き取れるようになった。
○ペアとコミュニケーションをとるのがうまくなってきた。これからも Small Talk をしたい。 ○ Small Talk で前より話せた。 ○最初はしゃべれなかったけど、最後は最初よりしゃべれるようになって楽しかった。

図6 Small Talkに関する生徒コメント

(2) 教科書本文を活用した Skit 活動

① Small Talk カードで身に付けた表現の活用

単元で学んでいる教科書の本文(対話文)を活用してペアで Skit 作成を行った。教科書に書き込みをさせると、Small Talk で行っている会話のようにあいさつから始まり、相づちやキーワードの繰り返しを加えてほぼ全ペアが Skit を短時間で完成させることができた(図7)。

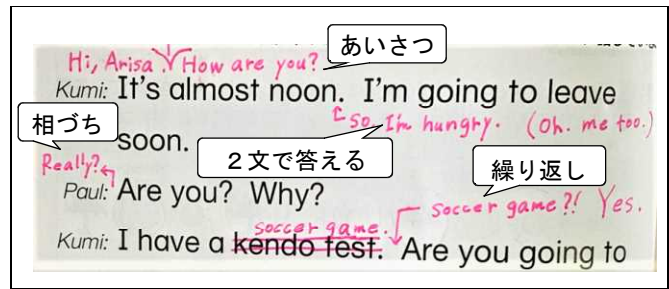


図7 Skit作成の様子

Skit 作成にあたって、対話文の内容理解は必要であるが、新出単語をノートでチェックしたりと主体的に対話の流れを理解しようとする生徒の姿があり、今後も継続していきたい活動となった。

② Skit の様子

Skit 作成後は、ペア毎に発表を行い、その内容から良かったフレーズ等を Good Expressions として全体で共有をすることで、表現の幅を広げる機会とした。"Have a good time."や"Enjoy your concert."など日常的に仲間同士で使える表現を共有できた。また、授業のまとめとして、「相づちのような表現をどこのタイミングで言うかわかった」と挙げた生徒がおり、英語に関するアンケートの自由記述欄も合わせると、クラス全員から図8のような感想があった。このことから、Small Talk で行っている会話が実際の対話の中でも生きてくることを実感させるのに有効な活動であると考えられる。生徒達は Small Talk カードで使用した表現を自然に取り入れており、会話の継続や広がりが必要なスキルとして活用することができた。

○相づち表現を使うことによって、話の内容が豊富になった。 ○次は Have a good time.を使いたい。
○ I have a question.がよかった。まねしたい。 ○ Are you?を Really? So soon?などに変えられた。
○Rさんペアで笑顔で目を見て話しているところがよかった。

図8 Skitに関する生徒コメント

(3) 定期テストとパフォーマンス・テスト

① 定期テストの考察

期末テストでは、外国語表現の能力の領域において、会話を広げる書き込み式の問題を出題した。図9のように自由にあいさつや相づち、相手の発言への応答を考え、Small Talk で使った表現を活用して答えた生徒が96%いた。全体の71%の生徒は、自然な流れで適切に答えることができた。

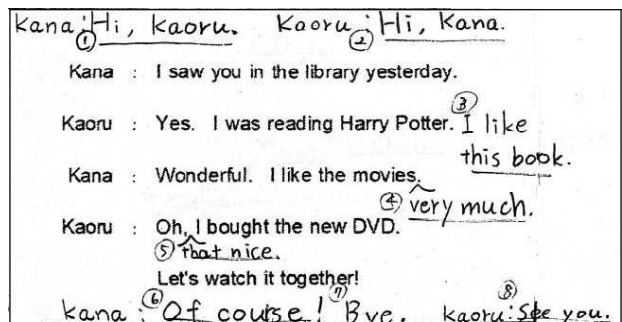


図9 定期テストでの会話のやり取り

② パフォーマンス・テストの方法と実際

単元の到達目標として、最終時にパフォーマンス・テストを行った。順番にペアで教師の前に来て行う。Small Talk と同じように、提示された"What are you going to do this weekend?"や"Do you have any plans for this summer?"のような2つのトピック(4パターン

を用意)から1つを選び、2分間計時して取り組んだ。Small Talk カードを持参する生徒もいたが、パートナーとのアイコンタクトを欠かさずに全体的に笑顔で会話を楽しむ雰囲気が見られた(写真3)。



写真3 パフォーマンス・テストの様子

前述したルーブリック(表2)を用いて「ニアシの法則」と「文法」のそれぞれの項目に対して評価を行ったところ、会話を広げるために必要な2文で答える・相づち・質問を含む「ニアシの法則」を9割以上の生徒が活用することができた。一方で、「文法」に関する「willやbe going toを適切に用いて、予定や計画を伝えることが2回以上できている」と「I think (that) ~等を用いて自分の考えを伝えることが2回以上できている」の項目では、それぞれA評価基準に達した生徒は、わずか20%程度にとどまった(表4)。パフォーマンス・テスト当日の朝には、校内の取り組みとして「基礎力テスト」が行われており、同じくwillやbe going toを用いた予定や計画を伝える文、I think (that) ~を用いた考えを伝える文の整序問題を計20問、20点満点で出題した。結果は、全員が15点以上の合格を達成しており、これらの文法事項の知識については身に付けていると言える。会話での活用となるとアウトプットがまだ弱く、文法事項を指導する際にその理解や練習、実際の使用を繰り返す取組が不十分だったことが反省として挙げられる。

表4 パフォーマンス・テスト結果【抜粋】(N=24)

評価基準			%
ニアシの法則	A	アイコンタクトをしながら相手と相づちと確認のための繰り返しをしながら会話をしている。	96
	B	アイコンタクトをしながら相手と相づちか、確認のための繰り返しか、どちらかをしながら会話をしている。	4
	C	相づちや確認のための繰り返しをして会話に参加するのに練習が必要である。	0
文法	A	willやbe going toを適切に用いて、予定や計画を伝えることが2回以上できている。	21
	B	willやbe going toを適切に用いて、予定や計画を伝えることが1回できている。	13
	C	willやbe going toを適切に用いて、予定や計画を伝える練習が必要である。	66

(4) 英語に関するアンケート結果

検証前(5月)と検証後(7月)に行った英語に関するアンケートで、「ペアでの英語での会話」や「スキット」は好きかについての質問を行った(図10)。数値的な変容は多くは見られないものの、単元を通して行ったSmall Talkや2回取り入れたSkitを好意的に思っている生徒は多く、検証後にはこの2つの質問に「あてはまらない」と答える生徒がいなくなった。その変容が見られたうちの1人の生徒は、自己評価表の「Small Talkはペアと積極的に話した」の項目において、単元初めはC評価だったが、第3時ではB評価、第8時にはA評価へと変わり、授業の活動の様子にも明るい変化が見られた。

また、図11には「自分の気持ちを伝えることができる」生徒や「英語で話している人の気持ちや考えを理解しようとしている」生徒の検証前後の変化を示した。肯定的な回答をする生徒が少数ではあるが増加した。しかし、検証授業のI think (that) ~の文を扱った第7時の自己評価表に「自分の考えを伝えることができた」と記している生徒が、単元の学習が終了した検証後のアンケートでは「自分の気持ちを伝えることができない」と答えていることから、学習事項の理解が定着につながっていないことが課

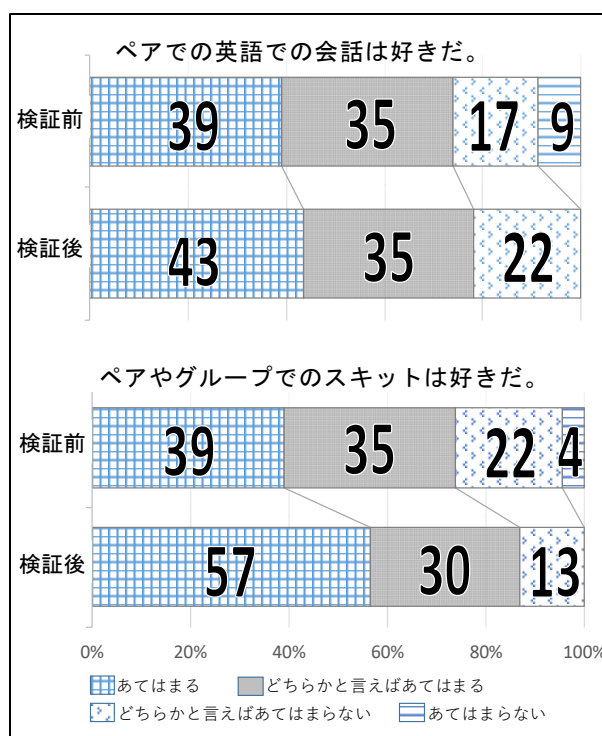


図10 Small TalkやSkitに関するアンケート(N=23)

題として挙げられる。一方、クラス全体としては、話す相手のことを理解するため、「聞こう」とする姿勢が身につけてきた変化が見られる。これは会話をすることによって問われたことへの返事や相づち、質問等を行うために不可欠な要素である。Small Talk カードで段階的に取り入れてきた会話の継続に必要なことが、この結果につながったと考察される。

これらの検証結果から、Small Talk や Skit 等のスピーキング活動を授業に取り入れ、会話を継続させるための表現を活用させることは、英語で会話をやり取りする力を育成するのに有効であったと考える。図12に示したように、生徒の「もっとコミュニケーションが取れるようになりたい」の意欲も高めることができた。英語に関するアンケートの自由記述欄に書かれた「スモールトークなどで、英語で話すときに必要な言葉などを学べて、外国人と話せるようなことを学べてよかった」という生徒の声からも、「話したい」要求をさらに高め、「話せる」生徒育成のために今後も授業改善を図っていききたい。

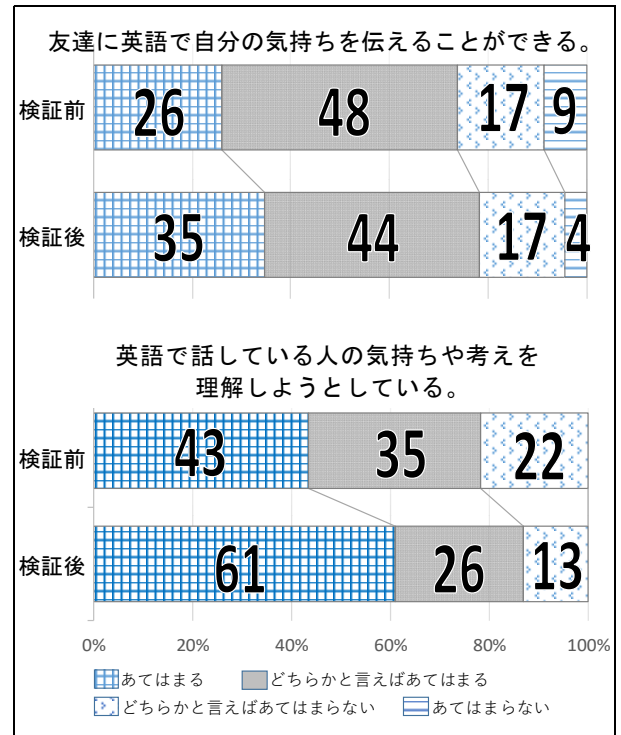


図11 やり取りの意識に関するアンケート (N=23)

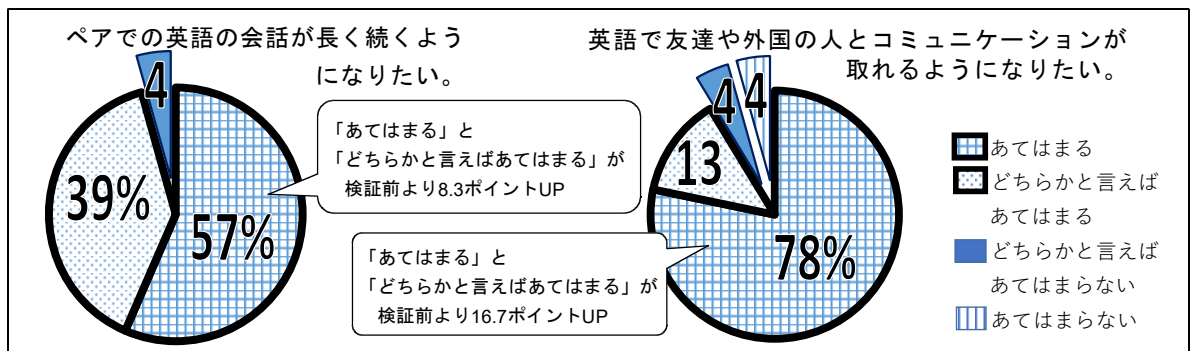


図12 検証後のスピーキングに関するアンケート (N=23)

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 単元を通じた Small Talk の継続と Small Talk カードの活用により、2分間の会話のやり取りを行うことができる生徒が育成できた。
- (2) 教科書の対話文を活用した Skit 活動等、会話のやり取りに重きを置いた指導の中で、適切に応答したり、質問をしたりする自然な流れで会話を発展させる等、fluency (流暢さ) は増し、生徒自身にもその実感を持たせることができた。
- (3) Small Talk と Skit に取り組む中、相乗効果として Small Talk で使用した会話を継続させる表現を Skit 作成時に活用することができ、スピーキング活動の充実を図ることができた。

2 課題

- (1) 会話の内容の深まりと英文の accuracy (正確さ) を高めるため、Small Talk 後は生徒の共通した誤りを全体で共有する場面を充実させる等、語彙や既習文法の定着に向けた取組を継続する。
- (2) Small Talk の中で単元で扱う文法事項を活用させる手立てが必要である。新出文法の導入時には、学習する基本文を用いて自己表現する機会を多く持たせ、定着につなげていきたい。

〈参考文献〉

- 新英語教育研究会編集部 2019 『新英語教育』 4月号 高文研
- 千菊基司 2019 『即興的に話す交渉力を高める！中学校英語スピーキング活動アイデア&ワーク』 明治図書
- 滝沢広人 2019 『中学英語 生徒が5分で話し出す！スピーキング活動ベスト45』 学陽書房
- 田村岳充 2019 『英語教育』 4月号、38-39頁 大修館書店
- 英語教育編集部 2018 『英語教育2018年10月増刊号』 大修館書店
- 胡子美由紀 2018 『中学英語 生徒がどんどん話せるようになる！即興スピーキング活動』 学陽書房
- 上山晋平 2018 『はじめてでもすぐ実践できる！中学・高校 英語スピーキング指導』 学陽書房
- 投野由起夫 2018 「CEFRに基づく「やり取り」と「発表」の違い」 『英語教育』 1月号 大修館書店
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』 開隆堂
- 文部科学省 2018 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』 開隆堂
- 金子朝子・松浦伸和 2017 『中学校新学習指導要領の展開 外国語編』 明治図書
- 佐藤一嘉 2014 『ワーク&評価表ですぐに使える！英語授業を変えるパフォーマンス・テスト中学1年』 明治図書
- 佐藤一嘉 2014 『ワーク&評価表ですぐに使える！英語授業を変えるパフォーマンス・テスト中学2年』 明治図書
- 佐藤一嘉 2014 『ワーク&評価表ですぐに使える！英語授業を変えるパフォーマンス・テスト中学3年』 明治図書
- 小松原唯弘 2013 『英語の授業を楽しくする10分間の帯活動「フリートーク」で表現力を育てる』 三省堂
- 西巖弘 2010 『ワードカウンターを活用した驚異のスピーキング活動22』 明治図書
- 道面和枝 2009 『中2で楽しく会話が続く！「2分チャット」指導の基礎・基本』 明治図書

〈参考WEBサイト〉

- 文部科学省 2017 小学校外国語活動・外国語科研修ガイドブック
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm（最終閲覧：2019年8月）
- IELTS Speaking: How to Improve Fluency with the “4/3/2” Technique
<https://www.ielts-master.com/ielts-speaking-becoming-fluent-with-the-4-3-2-technique>（最終閲覧：2019年8月）